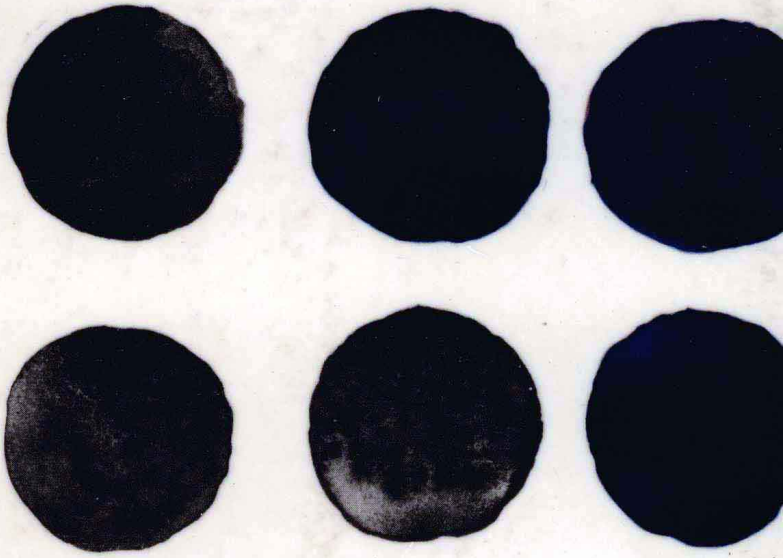
新しい世界の文学



鰯の埋葬■バビロンの邪神

フェルナンド・アラバール
宇佐美斉訳

白水社

鰯の埋葬／バビロンの邪神

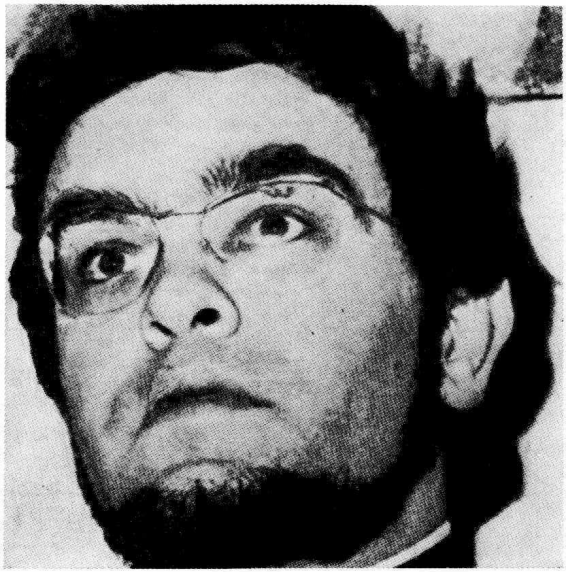
新しい世界の文学 67
鰯の埋葬／バビロンの邪神
一九七四年六月三〇日印刷
一九七四年七月一〇日発行

訳者略歴
一九四二年生
一九六五年京大文学部仏文学科卒
フランス近代詩専攻
関西学院大文学部講師

訳者 © 宇佐美斉
発行者 寺村五一
印刷者 田中昭三
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替 東京三三二二八
郵便番号一〇一

理想社印刷・加瀬製本

(分) 0397 (製) 76670 (出) 6911



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

鰯の埋葬■バビロンの邪神

フェルナンド・アラバール
宇佐美斉訳

白水社

目次

鰯の埋葬　7
バビロンの邪神　145
解説　281

鰯の埋葬

——小人ヒエロニムスの書

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

いつものように人影のない大通りを、ぼくは窓から見おろしている。
ふいに、二十人ばかりの女たちの一行が現われる。彼女たちは、ゆっくり歩きながら、たがいにおしゃべりし合っている。
フットボールかラグビーの試合（あるいは実際の戦闘かもしれない）について、あれこれ言っているようだ。きれぎれのことばがいくつか、ぼくのところまで聞こえてくる。
「夜が明けてから……瀕死の連中のなかには」ということばが、はっきり聞き取れる。鎖で壁に縛りつけられ、両足の自由を奪われているにもかかわらず、せいいっぱい身をのり出してみるが、もうざわめきのような話し声しかとらえられない。一行は遠く右手のほうに消えて行く。
時計が四時を打つ。ぼくはマンドラゴラの鉢に水をやりはじめる。人の話し声がまた聞こえてくる。窓辺に寄って見ると、前のよりさらにものものしい一行が目に入る。熱心に

議論しながら近づいて来る。ギャバジンのレインコートをひるがえして、ひとりの女が先頭になろうとして走っている。他の連中は大騒ぎをしていて、何を言っているのか理解できない。そのうちの十人ばかりが、隊伍を組んで歌っている。

みなさん　おひとついかがです？
あのラ・パリースの歌を
おなぐさみになりさえすれば
愉快な気分になれるでしょう

彼女たちの姿も遠く見えなくなる。

ついで犬が一匹あらわれ、その後から長い自動車の列がのろのろとついて来る。さわがしいクラクションの音が響きわたる。幾人かの運転手がボンネットをあげて、前の運転手たちを口ぎたなく罵っているのが見える。運転手以外に乗客の乗っていない車もあれば、ぎっしり詰め込まれて、四方八方に顰め面をした顔がのぞいている車もある。それらの自動車のなかには、霊柩車が二台、見分けられる。一台は白い小さな柩をのせており、もう

一台は黒い大きな柩をのせている。
車の後には、見わたすかぎり、群衆が大通りに散らばっている。彼らは大騒ぎしているが、歌っている内容は、はっきり聞きとれる。

ラ・パリースは無一文
家柄とは不釣合
けれど豊かになってから
なんら不自由しなかった

2

彼女がはじめて来たとき、ぼくは彼女のことを知らないと言った。返事がなかった。彼女からトランプを一組もらって、ポケットに入れた。「名前はきっとリスって言うんだ」そう思った。
ぼくは口をつぐみ、彼女も黙っていた。彼女が立ち去るとき、ぼくが「ありがとう」と

言うと、彼女は「さようなら」と言った。ぼくはもう一度「さようなら」と言った。

数日後、ふたたび彼女に会った。彼女はぼくの部屋をかたづけはじめた。ぼくは邪魔にならないようにと、戸棚の上によじ登った。

その日以来、彼女はときどきやって来た。たしか一度、前のより大きなトランプを一組持って来たことがあった。ダイヤは血で、ハートは赤インキで塗られていた。

彼女は、さまざまに組み合わせた魔術的な象徴の意味を説き明かしてくれたが、ぼくはほとんど忘れてしまった。それから彼女は言った。「じゃあ、おまえは字が読めないのね？」さらにつけ加えて、「もうじき三十というのにねえ！」と言った。ぼくは彼女から読み方を、ついで書き方を教わった。それで今では、自由に読み書きができる。

ある日とうとう彼女に言った。

「あなたはリスって言うんでしょう？」

彼女は答えた。

「いいえ、アルタゴールです」

3

旗が通り過ぎて行くのが窓から見える。太鼓腹をした、十二歳ぐらいの大人びた子供が、骰子とサソリの模様の旗を掲げ持っている。ひとりの老婆が彼を嘲笑ったり、指さしてからかったり、手をとったりしている。他の連中は彼女にはなんの注意も払わない。

大通りは、非常に広いが、のろのろ歩いたり、ときにはほとんど速足で行進したりする群衆であふれている。旗はまだ行進し続けている。弓矢が刺し貫く青いハート、「コカコーラを飲みましょう」というレッテルつきの壜、それに三角形のなかに目玉を描いたものもある。ぼくの窓から見分けられるのはそれらだけである。正面の歩道にひるがえっている旗は、色だけが遠くに見える。

その後から、バトンガールが行進して来る。彼女たちの列は互いに密接していて、なかなか空中にバトンをほうり上げることができない。なかに日本人の娘がひとりおり、耳飾りをつけているが、そこから振り子のようなものが下がっている。ぼくは首をのばして、どのようなものでそれらが飾られているのか探ろうとする。もっとよく見ようと思って、

双眼鏡を取り出してみる。ひとりの仲間がその耳飾りをもぎ取り、耳朶をひきちぎってしまう。ほとんど血は出ない。

双眼鏡を調節しながらぼくは、左手の群衆のなかに身じろぎもしないでいるひとりの長髪の人物が、おそらく嘲るような薄笑いを浮かべているのであろう、ぼくを見つめているのを発見する。誰も彼を押したり突いたりはしない。その黒い瞳が、鋭くこちらを凝視している。顔は非常に蒼ざめていて（白粉を塗っているのかもしれない）、髪は長く白い。ぼくは彼の視線をかわす。

反対側に、歯みがきの商品名のついた腸膜皮製の風船を持った一行が見える。それらを手にしているのは子供たちで、けばけばしい服装をしていて、それぞれ父親に肩車をしてもらっている。そのうちのひとりは、長いパイプをふかしている。窓の下を通るとき、みんながぼくを指さして行く。ひとりの男の子は、ぼくのほうへ手をさしのばして、顰め面をし、両腕をばたばたさせて、とうとう風船を飛ばしてしまう。

顎に幾本か白髭をたくわえたひとりの老人が、ぼくの窓の前で立ち止まって言う。

「わしの子猫を見ませんでしたかな？　黒斑の白なんじゃが。ねえ、ごらんになりませんでしたか？」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c